アンティ・ベラム南部奴隷制度の功罪をめぐる論争: レヴィジョニスト登場以後の展望

服部, 哲郎

https://doi.org/10.15017/2244121

出版情報: 史淵. 100, pp.219-232, 1968-03-01. 九州大学文学部

バージョン: 権利関係:

アンティ・ベラム南部奴隷制度の功罪をめぐる論争

レヴィジョニスト登場以後の展望 ―

1

服部

哲

郎

) まえがき

(二) レヴィジョニスト登場の背景

三 初期のレヴィジョニストたち

四 T・P・ゴーヴァン以後

伍むすび

\subseteq

テキストにも反映し、それらにおけるアンティ・ベラム奴隷制度の評価は頗るまちまちである。いうまでもなく、久しき あれ、これまで論争に参加した最も有能な論争者たちの論著を通して、論争の展開過程に再検討を加えることは、争点の るべき進歩がなかったのはなぜか。諸問題の解決のため従来試みられた方法以外に、もはや残された道はないのか。とも にわたる論争がこの国の奴隷制研究に斉らした貢献は決して小さくはない。にも拘らず、論争じたいの調整にこれまで見 れ、見解の対立は一向に緩和された気配もない。そのことは今日アメリカで広く読まれているこの国の一般史や経済史の アンティ・ベラム南部の奴隷制度をめぐる論争はすでに百年を越える歴史をもつ。しかもなお論争は依然として続けら

アンティ・ベラム南部奴隷制度の功罪をめぐる論争(服部)

C

る。 解決へ向つて何等かの手がかりをうるために有効な方法の一つと考える。こ こ に あ えて論争史の展望を試みる所以であ ただ本稿においては、 紙面の制約もあり、 展望の範囲を、いわゆるレヴィジョニストの登場以後に限定することを断

:

っておきたい。

的効用に関する双方の主張は必ずしも全面的に排他的ではなかったのである。。それは後に双方の主張の多くの部分がU 済と福祉とにどのような影響をおよぼすかという問題が当然主要な争点とならざるをえなかったわけだ。ところでこうし た問題を中心に双方の立場は、 期待しえないと考えられたからである。そこで当時としては体制としての奴隷制度が南部の、あるいはアメリカ全体の経 由で彼等を告発しようとしても、 度が奴隷主にとつて有利であるという論拠を盾に奴隷制擁護論をぶったのでは、徒らに南部の小農や貧農を刺戟するだけ で却って逆効果が予想されたし、一方奴隷制廃止論者にとつても、奴隷制度によつて奴隷主たちが不当に儲けるという理 理解のために、 ーマであったといってよい。このことはしかし別に驚くべきことではなかった。当時の奴隷制擁護論者としては、 ム期の奴隷制論争においては、企業としての奴隷制度よりも、むしろ体制としての奴隷制度の問題がもっぱら中心的なテ 論争の展望をレヴィジョニストたちの登場からはじめるとしても、そのレヴィジョニストたちの登場する背景の それまでの論争史のごくあらましを大観しておくことは、やはり必要であろう。おもうに、アンティ・ベラ セクショナルな感情論をも交えて激しく対立したが、奴隷制度そのものの、 儲けることの基本的権利が一般に是認されていたアメリカ社会では、殆んどその効果を 経済的· 社会 奴隷制

度とを機能的に独立した別個のものとしてとらえる思考上の操作によってであった。すなわち彼によれば、プランテイショ それではフィリップスはどのようにして双方の主張の統一に成功したか。それはいわば奴隷制度とプランテイション制

・フィリップスにおいて一つの立場に包括されえた事実によっても例証されるであろう。

В

ある。かくてフィリップスは奴隷制度の存続意義を経済制度としてよりもむしろ社会制度として高く評価していたことが が、奴隷人口が次第に増大するにつれてそれははからずも人種支配のための手段として特別の役割をもつに至ったもので のを除いて、一般にそれは決して有利な商売ではなかったということにつきる。そうなると奴隷制度は企業としては南部 所論の詳細に立入る余裕はない。ただ結論的に見て彼の企業としての奴隷制度に対する評価は、特に経営条件に恵まれたも 抑止したという意味で、こんどは奴隷制廃止論者たちの主張をも受け容れたのであった。なおフィリップスは、 会を奪い去り、また労働力の資本化を通して南部資本の固定化、さらには枯渇化を斉らすことによって南部経済の発展を 点を認めたが、 成などの諸機能によってステイプル生産の向上に寄与したという意味で、奴隷制度擁護論者たちの主張した奴隷制度の利 化する手段として機能した。つまり彼はたとえばプランテイション制度が労働の規格化や手順の決定、労働力の指導・育 に存在しえた理由は何か。彼によれば、奴隷制度はもともと労働力支配の手段として南部社会に導入されたものであった にとって全く不利な存在物であったということになる。それでは一体そのような不利な経済制度が数十年もの間南部社会 ての奴隷制度のプロフィタビリティの問題を彼以後の論争史の中にもち込んだという点でも注目されるが、ここではその ン制度は労働力を組織し育成する役割を果したのに対し、奴隷制度はいわゆる「労働力の資本化」を通して労働力を固定 「奴隷制度はビジネスであるよりもむしろ生活であつた」という彼の言葉は、そうした彼の立場を端的にいい 一方、奴隷制度が労働力を固定化したことによって、屢々奴隷たちから労働者として技術的に向上する機 企業とし

ら三〇年代にかけて南部の諸州では活潑な州史の研究が興ったが、それらはとりも直さず彼の影響下に行われたものであ フィリップスの仕事は単に奴隷制論争史の上だけでなく、広く南部史研究の上に大きな足跡を残した。一九二〇年代か 従つてまた奴隷制問題についてもフィリップスの見解を支持する立場を示した。こうした立場の代表的な研究者とし

あてているように思われる。

アンティ・ベラム南部奴隷制度の功罪をめぐる論争(服部

=

後説のとおりである。 れる場合それは南部の経済全般にかかわりをもつ問題としてよりも、むしろ個人企業としてのプランテイションの経営に られる。ただこれらの人々の研究では専ら地方史の研究に主眼がおかれていたせいもあって、そこで奴隷制度が問題にさ てはミシシッピーのC・S・シドナー、アラバマのC・S・デーヴィス、ジョージアのR・B・フランダーズなどがあげ かかわる問題としてとり上げられたのは当然であった。しかしそのことが奴隷制論争史上にもつ意義の大きかったことは

は、奴隷制度が恵まれた条件の中でのみ採算がとれたというフィリップス的立場から出発しながら更に一歩をすすめて、 けることが出来たのだ」、としているが、それは全くフィリップス的立場の祖述に外ならぬ。それにひきかえラムズデル 理能力に秀でていたなどのせいであって、総体的に見れば「奴隷制度のおかげで儲けたというより奴隷制度にも拘らず儲 C・W・ラムズデルがあった。ヒルは企業としての奴隷制度の分析をしたその論文の中で、プランターの中にはたしかに 大きく儲けた連中もいたが、恐らくそういうケースは特に地の利をえていたとか、土壌に恵まれていたとか、個人的な管 一八五〇年代における南部経済の変動の中で奴隷制度が実質的に解体への道に追いこまれていったいきさつを分析してい さて、これら地方史の研究者の外にフィリップス的立場の継承者また推進者として注目される歴史家にJ・D・ヒルや

\equiv

る点が注目される。

つた間に、 的に不利であったことを立証する為に、フィリップスとその追随者たちが各種のデータを基礎にその足場固めに懸命であ さて以上のように奴隷制度が個人企業としての面においても、経済制度としての面においても、 漸く新しい観点からの挑戦が企図されつつあった。いわゆるレヴィジョニストの登場がこれである。 南部社会にとって基本

レヴィジョニストたちは前記のようにまずフィリップス批判として現われるが、しかしそれは彼等の見解があらゆる点

いうよりもむしろニグロの存在そのものにあったことを立証しようと試みたのであった。 らした要因としては、 れによって移民と奴隷制度との間に必ずしも関連性のないことを主張、従って南部の後進性の責任は奴隷制度にあったと る彼等移民人口の増加率について見ても、 南部移民の割合についていえば、奴隷解放以前と以後とでは以後の方が却って少なくなっていることや、また南部におけ 少なかったことは事実だけれども、アメリカにおける移民人口総数に対する南部移民の割合および南部の総人口に対する 統計資料に基きアメリカへ流入した外国生れの移民のうち、南部に定着した移民人口は、北部へのそれに比べてたしかに いうのがこれまでフィリップスとその一派によって広く受け容れられてきた見解であった。之に対しストーンは、 移民が南部への移住を回避したことと無縁ではなく、しかもその回避は南部に奴隷制度が存在したことと関係がある、 なった一つの主要な争点は、 から受け継いだが、そのたちおくれも奴隷制度のせいと見るべきか否かでフィリップスと袂を分った。この決別の契機と ヴィジョニストの先頭に立つ一人であつた。彼は南部が北部に比べて著しくたちおくれていたとする見解をフィリップス を共通の出発点としてそこから発足し、ついでそれぞれの研究活動の過程の中で若干の争点についてフィリップスとは異 でアンティ・フィリップス的であったということではない。むしろ初期のレヴィジョニストたちは、しばしばフィリップス に到達した人たちであった。ミシシッピーのプランターであつた歴史家A•H•ストーンもいわばそういら初期レ 南部の風土条件を考慮することの必要性をも指摘しているが、このようなストーンの見解は、 奴隷制度と外国生れの移民との関係の問題であった。 何、隷制度がなくなってからの方が著しく減少しているなどの事実を指摘し、そ 一体南部経済のおくれは、 なお彼は南部経済のおくれを斉 外国生れの 各種の ع

とりあげた。 そこでまずラッセルであるが、彼はストーンに比べると遙かに広い視野に立って奴隷制度と南部経済との関係の問 そして南部経済の一般的進路に大きな影響をおよぼしたものは奴隷制度というよりも、 むしろ南部の風土、

アンティ・ベラム南部奴隷制度の功罪をめぐる論争(服部)

てR・R・ラッセルおよびL・C・グレイによって受け継がれ、さらに発展せしめられることとなるである。

アンティ・ベラム南部奴隷制度の功罪をめぐる論争

だ。それに南部の経済力の掌握者であったプランター階級の生活態度が一般に濫費的であったということも南部資本の蓄 がはるかに大きいのだ。南部がいつも資本の不足に悩まされ、工業の発展に恵まれなかったということにしても、 積を阻害した一つの要因であった、と見るのである。 資本が奴隷という形で固定化されたためというよりむしろ当時の南部ではステイプル生産に投資することが一番有利であ から遠いニュー・ヨークであったとか、南部には彼等を惹きつけるだけの充分な経済的機会が乏しかったなどの要因の方 生れの移民を吸収出来なかったのも、そこに奴隷がいたということより、むし ろ 当時大西洋航路の唯一の終着港が南部 に雨が多く、しかも激しく降りつけて起伏の多い丘陵地帯の肥沃な土壌を流失してしまったからであり、また南部が外国 ったからにすぎないし、またかりに工業を興したとしても、当時の南部はそれを支えていくだけの市場性に欠けていたの ラム南部の土地がひどく荒廃したのは、奴隷を使って行われたプランテイション企業のせいというよりも、 なおラッセルは以上のように、南部経済発展の阻害者としての汚名 むしろ南部 南部

に高く評価しようとする態度を示しているが、そこにはいかにも積極的なレヴィジョニストとしての立場に立つ彼の面目® が窺われる。

つぎにグレイは最も包括的な態度で奴隷制論争に参加したレヴィジョニストの一人として注目されるが、その中心的な

から奴隷制度を護ろうとする立場を更に一歩すすめて、アンティ・ベラム南部における奴隷制度の歴史的役割をそれなり

化されていたことや、労働力そのものが強力な管理下におかれていたこととも相俟つて、むしろ高能率であったこと、その 労働力は自由労働力に比べて一般にコストが安く安定性があり、しかもプランテイション労働力としては作業内容が単純 は結局有利でなければならなかった、というのが彼の結論であつた。彼が奴隷制企業を有利と見た理由を要約すると、奴隷 関心はどちらかといえば企業としての奴隷制度の問題に傾いていた。そして奴隷労働力を利用したプランテイション企業

や労働力が浪費されたこと、市場の育成が阻まれたことなどを指摘し、南部経済全体からすると奴隷制度の存在は結局南 上必要があれば女子や子供まで農場に動員することも可能であったこと、それに若し奴隷の市場価値が高騰することにで た」ことを認めている点が注意される。すなわち彼は奴隷制度のために一般に南部の地方資本の蓄積が遅れたこと、 く反駁したけれども、しかも一方に於ては「奴隷制度が南部の経済的福祉におよぼした究局的な影響は有害なものであっ となどの諸点が指摘される。かくてグレイは企業としての奴隷制度の不利を主張するフィリップスとその一派の見解を強 ──それはアンティ・ベラム期を通じて屢々実際におこったことであるが──奴隷主の利潤は一段と増大したこの

論に力を傾注したが、その後につづくレヴィジョニストたちは、その殆んどが後者によって開かれた研究の路線に則って る最初の打撃を加えたところにその主要な歴史的意義があったといえる。なおここでいま一つ注意しておきたいことはラ いわゆる奴隷制プランテイション企業の採算性の問題に大きな関心を寄せることとなったということである。 ッセルが専ら経済制度ないしは社会制度としての奴隷制度論に終止したのに対し、グレイはむしろ企業としての奴隷制度 之を要するにラッセルとグレイの仕事は、それまでの南部史学界を支配したフィリップスの見解にいわば手ごたえのあ

部にとってマイナスであったことを強調しているのである。

そこでまず登場するのがT・P・ゴーヴァンとR・W・スミスである。ゴーヴァンはフィリップスとその後継者たちと

シドナーがプランテイション企業における収支計算に当って当然収入と見なすべき諸項目を、逆に支出として計上してい の収益性をめぐる論争に参加した。ただしここでは彼のシドナー批判の大要に触れるだけにとどめたい。すなわち、彼は くにS・ロビンソンやC・S・シドナーが用いた企業の簿記的分析の方法を再吟味することによって、プランテイション わゆるステイプル生産からえられる本筋の収益以外に、例えばプランターが家内奴隷から受けたサーヴ

アンティ・ベラム南部奴隷制度の功罪をめぐる論争(服部

されるべきだ、というのがゴーヴァンの結論であった。 欠点を改めれば、奴隷制プランテイション企業は、それまで一般に考えられて来たよりも遙に儲けの多いものとして見直 の中に計上した資本利子も実は彼にとっては実質的な利潤以外の何ものでもなかった。従って記帳方法におけるこれらの 地や奴隷の値上りによる収入など、すべて当然利潤として計上されねばならないとした。それどころか、シドナーが経 スとか、奴隷の手で栽培された食糧、 飼料その他の生産物でプランターによって利用された分はもちろん、手持ちの土

くのプランターたちのふところに流れこんでいた筈であるというのが彼の主張であった。 り豊富な史料的根拠に基いて再確認した以上のものではなかったと見られる。彼の本領はむしろ、アンティ・ベラムの奴 すべきでないとした。だから、若しこの種の算出方式によれば、シドナー一派によって計上された以上に大きな利潤が多 隷の時価でもって資本投資額を再評価することの不当を指摘し、例えば一八五〇年代に奴隷価格 が ひ ど く高騰した段階 ついては少からぬ関心を示しているが、この問題に関する限り彼の主張は概ねグレイ、ゴーヴァン、スミスらの見解をよ ところでこの簿記をめぐる問題にゴーヴァンとはやや違った視角からとりくんだのがR・W・スミスであった。 その高い時価を基準として、以前から所有していた奴隷やプランテイションで生れた奴隷に対する資本投資額を算出 スミスについで登場するのはK・M・スタンプである。彼も亦、プランテイション企業の収益性の問題に 彼は奴

込みのない非能率な奴隷主でない限り、何人もその奴隷所有から必ず利潤をえていた」とする基本的な所見に基いて、一 をも含めてこれまでのすべての研究者たちから彼を区別し、特徴づけているものは、「土地所有の大小を問わず、余程見 Institution" はおそらくフィリップス以後現われた、アンティ ・ ベラム南部奴隷制度に関する 最も包括的な 研究とし またアンティ・フィリップス的立場を最も明確に打ち出した代表的著作の一つとして注目される。 レヴ ィジョニスト

隷制度全般に関する問題をもっと広く且つ高い視野から見直すことにあった。 その意 味にお いてその 論 著"Peculiar

終焉させることがなかったとしても、奴隷制度が間もなく死滅したと推定しうるようないかなる根拠も存在しなかった。 八六〇年当時においてさえ奴隷制度が衰退に向っていた何等の兆候もなく、従ってまたかりに南北戦争が突然奴隷制度を

と断じているその主張の中に見出される。

によって儲けていたというのが彼等の主張の眼目であった。かくて彼等は企業としての奴隷制プランテイション経営の問 たグレイ以来のレヴィジョニスト的見解を再確認しているのである。 かという間に対しても、 た」として、レヴィジョニストの伝統的な結論にくみする。そして南部に何故経済の多角化や工業化が促進されなかった 題から出発しながら、 生産によって支えられ、そうでないところでは奴隷生産によって約束されていたということで、結局南部全体が奴隷生産 の面でも相当な収益をあげていた筈であった。つまり奴隷主の利潤は南部のうち、土地条件にめぐまれたところでは棉花 すると四・五%ないし八%であった。一方奴隷生産即ち奴隷飼育の利潤は、生れた子供の数によって七・一%ないし八・® の二・二%から生産性の高い土地での一三%までさまざまであるが、アンティ・ベラムにおける棉花経営の大部分を総括 インズの資本価値の公式に基いて利潤計算を行った。その計算によると、棉花生産の場合の利潤率は生産性の低い土地で に測定するにあった。すなわち彼等は、アンティ・ベラム南部プランテイション企業の典型的な仮想例をつくりあげ、 る。 of Slavery in the Ante Bellum South を発表してレヴィジョニストたちの論陣に加わったのは一九五八年のことであ %であったが、これらの数字からするアンティ・ベラムにおける奴隷主たちは、当然奴隷所有の面だけでなく奴隷生産 さて、ハーバードの若い二人の経済学者A・H・コンラッドおよびJ・R・マイアーが共同の論文 The Economics 彼等の目的は近代経済学の理論と概念に則って、奴隷制プランテイション経営の問題をとりあげその収益性を科学的 経済制度としての奴隷制度の功罪論にまで言及し、「奴隷制度は南部の経済的発展を阻害しなかっ 要するに農業生産面への投資が他のどんな産業への投資にもまさって有利であったとするこれま

もともと彼の本領は単なる奴隷制度の経済論争にあったのではなく、むしろこれまでのプランテイション史料を基礎とす て彼等と極めて近い立場を表明しているのである。ただここで特に注意しておきたいのはエルキンスである。というのは り現われている。すなわち彼等はいずれもコンラッド およ び マイアーの分析に依拠しながら、奴隷制度の経済論につい 例えば "Slavery" の著者S・M・エルキンスや "The Farmer's Age" の著者 P・W・ゲイツ等の見解の中にもはつき ところでコンラッドおよびマイアーのこの論文が今日の奴隷制研究者たちの間にかなりの影響を及ぼしていることは、

の分析に独自の社会心理学的方法を適用している点もその見解の当否はしばらくおき甚だ興味深い。 ところが一方コンラッドおよびマイアーの見解に対し、時を移さず反撃を加えたのはコーネル大学のダグラス・F・ダ

研究によってアンティ・ベラム南部奴隷制度の一般的特質を解明するにあったのだ。なお彼の場合いわゆる"Sambo"説 ころにあったと考えられるからである。すなわち彼の奴隷制度論の核心は、ラテン・アメリカにおける奴隷制度との比較 るアカデミックな研究方法そのものにあきたらず、アンティ・ベラム奴隷制研究の方法論に一つの新機軸をもち込んだと

え、 ラッドおよびマイアーが奴隷制企業からえられた収益は南部経済の発展のために実際にはあまり利用されなかったとはい は実は企業として儲けていたにも拘らず南部経済全体の発展にとっては不利であったことを力説するのである。またコン の発展にとって障碍であったとする二者択一的問題として考察したコンラッドおよびマイアーの誤りを指摘し、奴隷制度 ウドであった。 少くとも 利用される 可能性も 充分にありえたとしたのに対し、ダウドは南部の工業化がおくれたのはもともと南部 彼は奴隷制度の功罪を論ずるのに、奴隷制度が個々の企業として儲かっていたか、さもなければ南部経済

自体近代資本主義を成立させるに必要な諸要因が根をおろしりる社会的風土的条件に欠けていたらからだとした。 なおさらに新しいところでは、 ユージン・D・ジェノヴィーズも奴隷制度の存在がアンティ・ベラム南部における国内

市場の形成を阻害した所以を説き、 レヴィジョニストに対する批判的立場を打出しているが、ここではその内容に立入る

Ê

題を投げかけているだけでなく、一般に一九世紀アメリカ経済史における奴隷制度の歴史的役割に関するわれわれの理解 らかといえば第二義的な問題にかかずらいすぎて来たように思われることである。真の問題は単なる利潤の問題でも簿記 にはやはり南部経済の展開の中で奴隷制度のゆえに起った現象と、 そ れ と は無関係にあらわれた結果とを明確に区別し じめをどうつけるかである。その点の解明がこれまでの論争では必ずしも充分でなかったように思われる。その点の解明 を深める上で大きく期待させるものがあるといえよう。 は最近エルキンスやジェノヴィーズによって試みられようとしている研究方向は単に奴隷制論争の前進のために新しい問 の問題でもない。それはあくまでも第一義的に南部経済の発展そのものに直結する問題でなくてはならない。 いとすれば、とくにグレイ以後主として企業としての奴隷制度の経済論に関心を傾けた論者たちは、 に、たとえ奴隷制度が企業としては儲かっていたとしてもそのことが必ずしも南部経済全体の発展につながったわけでな なくては画竜点晴を欠くというものであろう。それからいま一つ注意されることは、ダウドがい み じ く も指摘したよう それとはまた別個に南部経済の多様化を妨げたものが奴隷制度以外のどんな要因でもなかったことを合せて立証するので 張する論者が奴隷制度の存在しなかった地域で経済が順調にすすんだ事実を明らかにするのはそれはそれでよい。 いこんでいる学者はおそらく一人もあるまい。 さてジェノヴィーズも指摘しているように、 その両面からの綿密なる検討がなされねばならないであろう。例えば奴隷制度が南部経済の多様化を妨げたと主 ただ問題はどこまでが奴隷制度の責任でどこからがそうでないか、そのけ 今日ではもはや旧南部の経済的おくれが奴隷制度だけのせいであったと思 あまりにも永くどち その意味で しかし

アンティ・ベラム南部奴隷制度の功罪をめぐる論争

- たとえば、Avery O. Craven 教授はその著 The Coming rk, 1949), 273 — 78) なお、経済史家については、 Clement Eaton, A History of the Old South, (New Yo 部が本来農業的社会であったことの中に責任の大半が帰せ 91) としているのに対し、 Allan Nevins 教授はそれとは History of the South, (New York, 1953), 129—32., られるべきだ、とした。(Francis Butler Simkins, A く、南部の自然条件や奴隷主たちの浪費癖、なかんずく南 も、南部経済がおくれたのは奴隷制度のせいだけで はな で南部経済の発展にとって不利であったことを認めながら 教授は、それぞれの概説書において、奴隷制度が多くの点 優れた南部史家、F. B. Simkins および C. Eaton の両 のではなく、南部の経済的おくれは奴隷制度によって押し 全く反対に、南部は決して農村的なおくれを自らえらんだ backwardness) をえらびとったのだ」 (Ibid., pp. 90-の意味では「南部は自ら 好んで農村的 なお くれ (rural せいではなく、むしろ南部人の理想や価値観のせいで、そ のおくれはこれまで度々考えられてきたように奴隷制度の 制度と南部の後進性との関係の問題をとりあげ、南部経済 of the Civil War, (New York, 1942) において、奴隷 Union, 2 vols., (New York, 1947), I, 493—94) 一方 つけられたものと見ている。(A. Nevins, Ordeal of the
 - おくれに対して責任をとるべきだと見ている点でほぼ一致 した立場をとっているといえよう。 (Louis Hacker, The Triumph of American Capitalism, (New York, 1940), 317—21, Edward C. Kirkland, A History of American Economic Life, (New York, 1951), 170— 73, Ernst L. Bogart and Donald L. Kemmerer, Economic History of the American People (New York, 1947), 386—410)
 - Ulrich B. Phillips, "The Origin and Growth of the Southern Black Belts," *American Historical Review*, XI (July 1906), 803—4. U. B. Phillips, American Negro Slavery, (New Yprk, 1918), 291, 313—14.

2

- (w) U. B. Phillips, "The Economic Cost of Slaveholding in the Cotton Belt." Ploitical Science Quarterly, XX (June 1905), 272. Phillips, American Negro Slavery, 395—99.
- Phillips, "Economic Cost," 271-74. Phillips, Americar
 Negro Slavery, 391-92.
- © Phillips, "Economic Cost," 275. U. B. Phillips, "The Slave Labor Problem in the Charleston District", Political Science Quarterly, XXII (September 1907), pp. 416—39. U. B. Phillips, "The Central Theme of Southern History", American Historical Review, XXXIV

Louis. Hacker にしても、 E. C. Kirkland にしても、

あるいはE. L. Bogart にしても、奴隷制度は南部経済の

- (October, 1928), 30-43
- © Phillips, American Negro Slavery, 401
- © James D. Hill, "Some Economic Aspects of Slavery, 1850—1860", South Atlantic Quarterly, XXVI (April,

1927), 174.

- © Charles W. Ramsdell, "The Limits of Slavery Expansion", Mississippi Valley Historical Review, XVI (September, 1929), 151-71.
- © Phillips, American Negro Slavery, 338, 401.
- (a) Alfred Holt Stone, "Some Problems of the Southern Economic History", American Historical Review, XIII (July, 1908), 784.
-) Ibid., 791.
-) Ibid., 35—36.
- ⑤ Ibid., 43—44
-) Ibid., 47—48
- il Ibid., 49—50
- Bid., 53

アンティ・ベラム南部奴隷制度の功罪をめぐる論争(服部)

- Ibid., I, 468-71, 548-49.
- Ibid., I, 476-77.

(21)

- (3) Ibid., II, 940.
- (3) Ibid., II, 940—41.
- ② T・P・ゴーヴァンのS・ロビンソン批判については
 Thomas P. Govan, "Was Plantation Slavery
- Profitable ?", Journal of Southern History, VIII
 (November, 1942), 514—17.
- 六一)七八一八五参照。 かては拙稿「アンティ・ベラム南部における奴隷制プラのいては拙稿「アンティ・ベラム南部における奴隷制プラのいては拙稿「アンティ・ベラム南部における奴隷制プラ
- ® Robrt W. Smith, "Was Slavery Unprofitable in the Ante Bellum South?", Agricultural History, XX (January, 1946), 62-64.
- Kenneth M. Stampp, The Peculiar Institution: Slavery
 in the Ante-Bellum South, New, York, 1956), 399—
 418
- S Ibid. 417.
- ® Alfred H. Conrad and John R. Meyer, "The Economics of Slavery in the Ante Bellum South", The Journal of Political Economy, Vol. LXVI (April, 1958), 107.
- ∃ Ibid. , 106

- アンティ・ベラム南部奴隷制度の功罪をめぐる論争(服部)
- Ibid., 109.
- Ibid., 110.
- Ibid., 119-122.
- Stanley M. Elkins, Slavery; A Problem in American 233-36. Paul W. Gates, The Farmers' Age: Institutional and Intellectual Life, (New York, 1963),
- Agriculture, 1816—1860. (New York, 1960), 154—55
- Ibid., 82-87, 103-15, 131-33 Elkins, Slavery, 63—80, 135—37.
- Douglas F. Dowd, "The Economics of Slavery in the Ante-Bellum South: A Comment, The Journal of Political Economy, LXVI (October, 1958), 441.
- Conrad and Meyer, "Economics of Slavery", 121

40

Dowd, "A Comment", 440-41.

- Eugene D. Genovese, The Significance of the Slave Plantation for Southern Economic Development, The
- Journal of Southern History, Vol. XXVIII (November, 1962), 428—437.

On the Controversy on Slavery in the Ante Bellum South —Since the Rise of the Revisionists—

Tetsuro HATTORI

The historians and economists in the United States have continued arguments on the ante bellum slavery for more than one hundred years. And still they have not reached a consensus on this problem. It might be nonsense to expect that this vexing problem will ever be resolved to everyone's satisfaction. I believe, however, it may give us some suggestions for substantial progress in solving the problem that we trace the development of this lasting dispute through the works of the most able participants in it. That is why I have tried here to have a perspective view of the history of controversy of the ante bellum slavery. By the way I was compelled to limit my view within the sphere of the modern controversy since the rise of the revisionists and to give up making a more detailed explanation of the works of some important disputants.